

肛虐淫行OL



キンク文庫

肛虐淫行OL

キンク文庫

文庫本（40字×17行）

206ページ

第1章 典子

引越し先のマンションから向かった先は、それなりに距離にある都市銀行。今どき都市銀行の支店が、街中に一つしかないというのも不思議なくらいだ。

「あれっ、印鑑って持ってきた？」

「ああ持ってきたよ」

「ふう、ならよかつたわ」

地方への転勤、つまり左遷のため、妻の京香とともに郊外に引越してきた博之。出世コースから外れたとかそういうレベルの話ではない。会社の人員削減の話でもあれば、真っ先に首を切られそうな場所に飛ばされたようなものだ。

給与の受け取りや光熱費の支払いなど、お金の出し入れに関するほとんどを同じ都市銀行でやっている。

街中に一つだけ支店があると聞いていた。そこが引越し先のマンションからそれなりに遠い場所にあることを知り、わざわざタクシーを呼んでここまで来たのだ。

「へえ、もつと大きいのかって思ってたんだけど……」

「まあアレじゃないか、無いよりはマシっていうか」

「だってココってけっこう来なきやいけないし……方が一無くなったりでもしたら大変でしょ？」

「それもそうだけど、大丈夫じゃないかなあ。一応、大手なんだし」  
ガ。

入り口の自動ドアが開いた。入ってすぐ右側にATMコーナーがずらりと並んでいる。平日の昼間なので混雑していない。

「いらっしやいませー」

カウンターの向こうには20代後半くらいの女性が立っていて、二人に向かって思いきり作り笑いをしている。二人が今日一番の客だからなのか、いつもは座ったままなはずのお姉さんは立って挨拶した。

開店して間もないせいか、制服もビシツとしている。上は紺色の長そでのスーツ。下は同じ色の膝上くらいまで丈のあるスカートを着ている。大手銀行らしく品が良く清潔感もある。中には白いカラーつきのシャツを着ていて、明るいブルー色のスカーフをネクタイのように巻いている。

「あっどうも」

二人はカウンターの前に並んでいる椅子に座った。薄いブルー色の大きめの椅子で、これも新品だと判る。椅子の後ろに腰から上を覆う具合のよい背もたれが付いている。単な

る客なのに何か社長にでもなった気分だ。

「え〜と住所変更を——」

手にしていた数冊の通帳を、カウンターのの上に置いて話し始める京香。博之は便乗するよう、持っていた通帳をそれに加えた。

「あつではこちらの用紙に——」

事務のお姉さんは、住所変更用と思われる用紙をサツと机の上に差し出した。二人がこの街に引越してきたばかりで、住所変更をしにここに来たのだと判っていたような手際の良さだ。

用紙の記入は京香に任せて、しばらく新しく出来た店舗内をぐるりと見渡す博之。

(はあくこんな綺麗なオフィスで、制服姿のお姉さんとイチャイチャしてみてもなあ)

目の前の清楚な感じのお姉さんは、博之を性的に悶々とさせた。例えば銀行強盗でもして、きっちり制服を着たお姉さんたちにスケベなポーズをさせ、さらには制服を捲り上げてバックから思いつき突いてみたい。そんな男なら誰しも抱きそうな願望を呼び起こした。

そして、博之の妄想をさらに煽るような出来事が、このすぐ後に起きたのである。

右隣に座っている京香の反対側、つまり左側を向いた時だった。

一番隅っこのカウンターだったので、そこから左側はちよつとしたスペースがある。そ

のスペースを埋めるように棚があつて、金融商品とか住宅ローンのパンフレットが並べられている。そこに若い20代前半くらいの女性銀行員さんがしゃがみ込んでいた。新入社員と思われ、そこでパンフレットの整理をしているようだった。そしてなんと、その女性銀行員さんのパンティがばっちりと見えていたのだ。

彼女は博之の視線を意識しているのか、股間をこちらに向けたまま、その体勢を変えようとしないうとしない。

ごくり……。

思わず息を飲んで食い入るように見てしまった博之。隣で住所変更の書類に記入している京香。彼女を横目で気にしながらも、博之の視線というか意識は、完全にしゃがみ込んでいる女性銀行員さんにある。

パンティは白色のようだったが、薄い肌色のストッキングで覆われていて、柄があるかどうかは判らない。ストッキングの線が、真ん中よりちよつとズレた位置で捻じれている。それがしゃがんでマンユがぶつくりと前に押し出されたせいだということもわかる。

銀行のようなオフィス特有の、無機的に明るい店内ということ、そして床のタイルカーペットの色が青とグレーの混ざった色だからか、彼女の履いているストッキングが妙に透明感があるように見える。公園や駅構内でたまに見ることが出来るパンチラとは異なる、いわば「業務用」のパンチラに思えた。

他の女性銀行員と同じ制服を着たその女性は、比較的若い。受付業務をやるにしてはまだ経験が浅いので、こういったパンフレットの整理や裏方の仕事を任されているのだろう。いかにもつまんなさそうに手を動かしていて、顔は肩くらいまである髪の毛ですっかり覆い隠している。

開いた股間を、博之にじっくり見てもらうように、あえて自分の顔を髪の毛で隠しているのかもしれない。知らない男に好んでパンチラを曝け出す時に、その表情まで見てもらいたいとは思わないだろうし。

さすがに顔を彼女と同じ高さにしてちゃんと見ることは出来なかった——が、だいぶ浅めに椅子に腰かけることによって、どうにか低い位置に自分の目の高さを持つて来ることが出来た。背中全体を覆うような椅子のデザインのため、博之の不審な行動は後ろからは見えないようになっていた。

(おおお……うゝむ)

(こんなに明るいとところでこんな股の開き方をしたら、銀行に来た男どもはみんな彼女の股間に注目しちゃうだろ)

今のところ銀行にいる客は博之と京香の二人だけなので、そんな心配は無用だったが、本当にそこまで心配してしまうくらい目立っている。紺スカートの中の純白パンティはかなり際立つのだ。

ネームプレートには飯田典子と書かれてある。

(典子——名前のイメージと違ってスケベだなあ)

ドキドキしながら若い女性銀行員さんのパンティを見物していた博之だったが、奥までよくよく見てみると、妙な出っ張りがあることに気づいた。彼女のおマンコのさらに奥側にである。

(あれっ何か出っ張ってる……なんだろ?)

場所的にはどう考えても尻の穴だ。

(ひよっとしてアナルプラグ?)

パンティの中に入っているとはいえ、パンティの外側に出っ張っている部分が少なくとも1センチくらいはある。

立っている時には、尻の左右の臀部によってプラグ自体は隠れる筈である。しかしこのようにしゃがみ込んで股を開くと、彼女の菊穴が自動的に開かれる。

和式トイレの恰好をして糞をひり出す際に、肛門入り口の粘膜がめくれる。それと同様に、アナルプラグも肛門内部から押し出される感じになるのと同じだ。

さらにそのアナルプラグにバイブレーター機能が付いているということが判ったのは、彼女が頻繁に尻の位置をズラすような動きを見せたからである。クイッククイックと、何かが敏感な箇所当たり、どうしても下半身が反応してしまう感じに見える。



顔半分くらいを覆っている髪の毛を頭を大きく横に振る事によって退け、建物の天井付近の方向を向いた。その眼は半ば白目を剥いているようにも見えてしまう。

ああ……。

よほど氣を付けていないと聞き取れないくらいに喘ぎ声が出た。

(こんなトコでおまけに自分の職場なんだぞ……)

さつきまで彼女の秘めたスカートの中を覗くことに必死だった博之。しかし、秘かにアナルにプラグを入り込ませていることが判ると、どうしてか彼女のその表情に視線がいつてしまう。

プラグから伝達される振動に、肛門内部の柔らかい肉ひだが反応する。さらに腰をクネらせ位置をズラすことによって、他の部分を気持ち良くさせる。

(アナル内部の感じやすい箇所を自分で開発してるとか?)

さまざまな憶測が、博之の脳裏を駆け巡る。

(ひとりですてんのかな?)

彼氏もしくは愛人でも同じ職場にいて、その男から命令されているのかもしれない。博之は銀行内をぐるりと見渡してみるが、それらしき男は見当たらない。

開店直後ということもある。店内には受付カウンターの向こう側に座っている女性銀行員さんの2人と、あとはこのアナルプラグをハメた変態女だけだ。

どういうつもりなんだろうな？ と不思議に思い、しゃがみ込んで一人で感じている女の顔にしばらく視線を向けておいた。彼女がたまに顔を上げた時に、自分の視線に気付くようにワザとそうしたので。

いつの間にか博之のペニスは固くなっていた。パンチラだけでなく彼女自身が肛門にアナルプラグをハメているということに興奮してしまったようだ。

(すごくエロいぞ、これは)

時折、肛門内部の粘膜がアナルプラグに擦れるようにその筋肉を収縮させている。彼女の尻が、前後にビクッビクッと小刻みに動く度に、博之はそんなことを想像していた。

ヌメヌメとした生ぬるい感覚が、典子の尻の中を支配しているようで、さらにここが普通の都市銀行の店内であるということが一層、彼女のアブノーマルの興奮を呼び覚ましていくようだ。

「はあ……ああ」

彼女は、細く尖った顎を、前に突き出すようにした。博之の熱い視線が、尻穴に突き刺さっているアナルプラグの膨らみにあることを感じとったようで、こちらからもはつきりと判るくらい、その出っ張りがニユルツと動いたように見えた。

博之はたまらずペニスのカリ首あたりを強く擦り始めた。すでにポケットの中ではつきりと膨張していることがわかる。主な視線は典子の口元に、そしてほんの少しの意識を右

隣りの妻の京香に置いた。

京香は既に、住所変更の書類への書き込みを終えている。用紙をカウンター向かいの女性銀行員さんに手渡して、そのチェックが済めばここの席を立たなくてはならないだろう。

（ちつくしよう。何か別に用事があればいいのに。せつかくのベストポジションが……ああもつたいねえ）

博之がそんなことを考えていると、都合のいいことに京香が、

「あつ公共料金の方も——」

口座の住所変更だけでなく、ついでに公共料金の方も申し込んでおきたいと言いだしたようだ。

（おおっそれはいい考え、さすが俺の妻だ）

またしばらくこの典子とかいう女のパンチラと、アナルプラグの膨らみが拝めると思うと何だかうれしくなる。

擦っていた自身のペニスの先端からは、いつの間にか先走り液が出ている。下に履いているトランクスには、粘っこい透明な液体が付着しているはずだ。ストラックスを通してその微かな匂いでわかる。

京香はすぐ隣の旦那が、まさかそんな気持ちのいいことになってるなんて、全く分かつ

ていない様子だ。公共料金の口座振替用の用紙を受け取り、その一枚に書き込もうとしている。一方、博之の左側にしゃがみ込んでいる典子という女は、依然として股を開いたままである。

そして今度はなんと、肛門にハマっていたアナルプラグが、床のカーペットに擦れるように、尻を前後させ始めた。プラグはパンティの中なので、何かの拍子でヌルツと出て来ってしまうことはない。だが下がカーペットなので、そこにプラグの片方を擦ると、アナルプラグの本体は肛門の中でぐりぐりと暴れ回ることが簡単に想像できる。

「あんっ……うんっ」

案の定、ちよつと擦っただけで典子の表情に変化があった。まさかそんなに刺激の強い快感が、押し寄せるとは思わなかったという顔をしている。

(感じてやがる)

その様子をじっくりと観察している博之。銀行の制服を着たまま、職場で人知れずオナニーをしている典子に夢中になっていた。ズボンのポケットの中でペニスの側面をシコシコと擦り、後はもうなるようになれと思いはじめている。隣に妻の京香がいることだけは忘れないようにした。典子はプラグの出っ張りを床に擦ったり、さらにはそのまま腰を上下させたりしている。

「はあはあ……」

隣の京香にまで聞こえてしまうのでは？　というくらいに聞こえる喘ぎ声だった。博之は京香が左側を向かないように、万が一そつちを向いても、なるべく自分の顔で典子の痴態が見えないようにブロックした。京香は書類のことで頭がいつぱいのようで、博之の左側にそんな女性がしゃがみ込んでいることなど全然気付かない。

一定の調子で、細かいピストン運動をしている典子の身体。銀行に来ていた客が、自分達以外にいないことが救いだ。もし突然、別の客が入ってきたら、この典子という女はどうするのだろうか？

(まっしかし、何もなかったように、しれっと立ち上がるだけだろうな)

博之の左手が擦っているペニスの大きさは、下に履いているトランクスの横からはみ出すくらいになった。そしてポケットから直にカリの下の方を擦る。典子の開いた股間と、彼女の感じているその表情を観察しながら、

(ああ……いいい)

あと数分後には射精してしまいうさだ——いや、何か「きっかけ」でもあればすぐにでも発射しそうな気配だ。もうあまりにも気持ち良くて、視界がぼんやりと虚ろになってきていた。それでも典子のストッキング越しの白いパンティ、そしてその下にあるアナルプラグの出っ張りに目がいつてしまふ。

(こっこれは?)

彼女のパンティのクロッチあたりに、何か染みのようなものが見える。

(すう、ああしたまんねえ)

つい、その染みの匂いを嗅いでしまった。たださすがにこの距離では匂わなかったが。朝一番の職場という環境の中で、真新しい制服のまま、知らない男の前で股を開いてしゃがみ込み、さらにアナルプラグを肛門の中に差し込んでいる。そして男に見せつけるように自分で腰をくねらせ上下させる女。

(露出狂?)

だが正直、そんなことはどうでもよかった。とりあえず今、この気持ちいい状態を続けてどうにか無事にフィニッシュを迎えたかった。

しばらくしたら妻の書類への記入も終わってしまうだろう。どうすればいい?

このまま中途半端に終わってしまうのは、どうしても勿体ない気がした博之は、

「あっ……あの」

思い切って、その女に声を掛けた。

「はっはいっ?」

女は驚いた顔をした。

それもそうだ——今まで自分がしていた痴態を黙って見ていた男が、突然に声をかけてきたのだ。

「とっ、トイレは？」

博之は、膨れた股間をズボンの上から押さえながら女に聞いた。そのまま起立すると、その膨らみがズボンの生地でテントを作ることは明白だ。それにもうほとんど「もうひと擦りでイク」という段階にあるのだ。

「えっと……」

最初は困惑した表情を見せたが、その直後に何か企んでいるような視線を博之に送った。それが何を意味するのか博之には判らなかつたが、彼女のそのいやらしい目つきに絡まれながら、あと数回擦ってイってしまいたい。そんな気がした。

「じゃこちらへ」

中腰の体勢までゆっくりと立ち上がる典子。どことなく躊躇しながら腰を上げるそのさまは、一気に立ち上がってしまうと肛門の中からアナルプラグがニユルツと這い出してきた。そうだったからに違いない。

中途半端な体勢で尻穴を気にしているその様子は、彼女のお漏らしを連想させた。制服そしてパンティとストッキングの中に我慢出来ずに排尿さらには排便という、どう考えてもこんな綺麗なオフィスでは出来ないようなことを想像してしまう。しかしそんなスケベな想像をってしまったことがアダとなった。

「あああ……だっ、ダメだ——」

もう何かがちよつとでも亀頭に触れたらイってしまいそうだった。隣に妻の京香が座っていることを忘れてしまっていた博之は、そこまで興奮してしまったことを後悔したが、もう後戻りはできない。

「ああ……」

イク寸前の気持ちの良さに上乘せしようと、目の前に中途半端に尻を突き出して立っている典子の顔を凝視した。

(どうせならこの典子という女の顔とケツを見ながらイこう)

開き直る博之だったが、

「こっちよ」

突然、博之の左腕が引っ張られ、その力が小さいブースのような部屋に博之の体ごと引き摺り込んだ。カウンターの内側のすぐ隣にあるブースで、パーティションで区切られているので、椅子に座っていれば外からは見えない。博之は、引っ張られるように歩いた最中に、何が起きたか覚えていない。

そして部屋に着くなり、

「うっ、うっ、ああああ——」

博之の快感はむなしく、すでにピークを迎えてしまっていたようだった。構わず典子は、ブースの椅子に博之を座らせた。博之は、最後のヒト擦りをするかしないかのタイミング



で、変な部屋に連れ込まれたようだった。

亀頭がトランクスを超えてズボンの生地に擦れてしまったので、部屋に入れられる最中にイってしまったことが判った。

「あううう……」

何が何だかわからなくて、正直、歩きながら射精してもそんなに気持ち良くなかった気がする。

「はあ〜」

しばらくして「突然、何をしてくれたんだ？」という目つきで典子を見る博之。ここに連れ込まれる途中で歩きながらイってしまった——もったいない。

ただ、妻の横でシコシコしながら射精してしまい、それが見つかった時のことを考えると、こうしてくれた方が正解だったのかもしれないのだが。

何となくがっくりした顔をしている博之を見て、

「じゃ、ちよつと待って」

女はそう言うと、博之の座っている椅子の前つまりテーブルの下にもぐり込んだ。

「えっ……」

驚く博之。

（ちよつ……まさか）

そのまさかは当たっていた。

座っている博之の脚の間に身体を入れると、典子はズボンのチャックを下ろし、さらに中から逸物を引っ張り出すようとしている。

「あら？」

期待していたより萎んでしまっているペニスに、女は少し意外だという顔をしている。

「さつきもうイッチャったんだよ」

亀頭あたりを触ってみればわかるさという感じで、萎みかけているペニスをチャックの中から引っ張り出す博之。仮性包茎のように半分くらい皮が被っていて、その皮と亀頭の間に、精液が入り込むようにべっとり付着している。むわくと、精液特有の匂いが辺りを包み込む。

他のブースには誰も居ないので、今のところ二人以外にこのことを知る人間はいない……と思う。

典子はどうと、それを見てガツカリするかと思いきや、なんと亀頭に付いているベトベトとした精液を美味しそうに啜り上げ始めたのだ。

ジュル、ジュル……ジュル。

唇を尖らせ、白濁の粘っこい液を、掃除機のように吸い上げていく。一回一回の吸い上げに、彼女は恍惚感のある表情を見せ、そして時折、博之を誘惑するような視線を送る。

実はコレが欲しかったんだ、という感じの満足した表情だ。

「あつ、あうううう」

思わず腰を浮かす博之。射精が終わって一分も経っていなかったのも、亀頭はまだ敏感な状態にある。

包茎気味の亀頭の皮を剥きながら典子は、隅々を掃除するように美味しそうに精液を吸い取っている。

ペニスはちゃんと勃起こそはしないが、それでも徐々に回復してきている。

まさか出した直後に、さらにもう一回だなんて今までに経験がない。せめて十分くらいはインターバルが欲しいと思うのが、男としては普通だろう。

この典子とかいう間違いない淫乱と思われる女性銀行員。博之の足の間に入り込んで、博之の股間の中に、自ら唇を突っ込んできたと言ってもいい。今は、博之の裏筋あたりに垂れてきている粘液を、舌先でペロペロと転がすように舐めている。

床のタイルカーペットに、ぺたりと股間をくっ付けるように座り込んでいたので、さつき見えていたアナルプラグは尻穴にかなり入ってしまったしていると推測される。何より逸物を丹念に舐めながら、腰をクイクイツと前後させている。どう考えてもアナルプラグを床に擦り付けて、自分も感じるように楽しんでいる感がある。

「うんっ、うんっ……うん」

見えているほとんどの精液を吸い取り終えたようで、今度は回復気味の博之のペニスを両唇の間にヌルリと含み込んだ。

「あっ……あああ」

射精し終えた直後に、亀頭を唇と舌で舐めてもらうのは、やはり気持ちがいい。もう精液は残っていないかもしれないが、このままだと二回連続の発射という可能性もある。

チュル……チュル……チュル……

ストロークは速いという訳ではない。ただ、カリの裏筋の部分を舌を小刻みに動かすことよって上手く刺激しているようだ。かなりツボを得たプロのような舌使いに、博之の腰はトロけそうになった。

思わず彼女の頭を左右から手で挟み込んで、同時に腰を上下しそうになったが、彼女のやりたいようにやってもらおうと思い、ここは彼女に任せた。

「うんっ、うんっ……うんあああっ」

典子は、尻を机の向こう側につき出すようにしていた。眠りから覚めたメス猫がよく見えるストレッチックくらいの、かなりの反り具合である。おそらく尻穴に入っているプラグを、床のタイルカーペットを当て、さらに別の例えばクリトリスや膣口付近の肉ビラも擦りつけて、自分でも気持ち良くなるうとしてしている感じがする。

「うんぐっ……うんっ……ぐ」

今度は亀頭をすっぽりと口の中に含み、上下の唇でカリの段差を刺激するように前後し始めた。生温かい唇が、カリ首から亀頭全体を這うように前後する。

典子の顔を近くで見ると、髪の毛を染めて盛ったりでもしたら、雰囲気的には人気キャバ嬢と言っても十分に通用するような感じである。顔は卵型で、顎は程よく尖っている。目鼻立ちは比較的にはつきりとしていて、どちらかというと下唇が厚くセクシーだ。

ちゃんとは覚えていないが、人気の女性アイドルグループでナントカ友美とかいう女の子に似ている。博之のお気に入り顔立ちをしているので、下の名前だけは覚えている。

さらに典子の頭の動きが段々と激しくなってきた。

「うんっうんっうんっ——」

そのサマを上から眺め、さらに手で彼女の髪の毛を掻き分けてあげた。なるべく音が出ないように気を付けているのが上から見てわかる。

であるが、後ろのドアから誰かが入ってきたら終わりだ。そうなったらどう言い訳をするつもりだろう、この女は。いや——状況的にマズいのは自分も同じ。誰かに見られて、それがそこに居る妻の耳にでも入ったらどうするんだ。タダでさえ書類を記入している妻の隣から、突然いなくなっただけの——。

(いやいやいや……そんなことを今さら心配してもダメだ)

博之は、もうそんなことは考えないようにした。既にやってしまっていることだ。もう

引き返せない。そうこうしているうちに、彼女自身の腰の動きが速くなってきた。

「うんっ、あっ……あっうん……」

下半身をクネクネとさせ、さらに度々ビクッビクッと痙攣させている。

「はあはあはあ」

息遣いも荒い。ペニスの横に沿えていた右手を退け、その手を自身の股間に持つていくと、クリトリスをパンティの上から指先で刺激するように擦っている。

「ああああ……」

一回目の射精が、実は不完全だったんじゃないかと思えるような快感が迫って来ていた。それくらい重く、そして腰の奥からズーンと来る快感だ。

「うんっぐ……うんっ……ぐ」

博之に視線を送りつつ、ただひたすら顔を動かし続ける典子。

（ああああ……近くでこんなに見つめられながらしゃぶられると……あああっ、すう）

典子は、亀頭を唇の上でハーモニカを吹くように滑らしている。さらにカリ首の後ろ辺りをペロペロと舐めながら、尖らせた舌先を博之の尿道の中に滑り込ませようとする。

もう十分に反り立っているペニスの先端にある尿道の入り口付近。亀頭よりもさらに敏感な箇所であり、そこに舌先が入り込んでくると、まずその快感の突然の変化に驚く。

肥大したペニスを美味しそうにしゃぶる女。この女に自分のペニスの全てを任せようと

思った。尿道に何を突っ込まれようが、もう好きなようにしてくれと思ってしまうのだ。ダランとかなりだらしない恰好で、下半身を女に任せる博之。

「はあはあ……ああ……典子」

つい名前で呼んでしまった。女は初めは驚いたようだったが、

「はあくん、美味しいわ〜」

色っぽい声で、精液欲しさに博之のフィニッシュを誘っているようにも聞こえる。

「あくん、欲しくなっちゃった……」

典子はぺたんと足を地べたに着け、尻の先が突き出るように背中を反らしている。顔は、椅子に座っている博之のいる方を見上げていて、ひな鳥が餌を欲している表情のようだ。

もう博之のペニスは既に「堅い」という形容が十分似合うくらい、反ったカタチがぼちりと造形され、典子の唾液でどどめ色の亀頭がテカって見える。

下からそれを、舌舐めずりして眺めている典子。

「欲しい」

典子はそう言うと、突然、中腰の体勢まで立ち上がった。

「えっ……」

突然のことに驚いた博之だったが、典子が何をしたがっているのかをすぐに理解した。自分がこの椅子に座ってペニスを反らせた状態のまま、彼女がその上にバックから座るよ

うに乗っかって、いわゆる座位のセックスをしようというのだ。尻をこちらに向けて、トイレをする直前のようにスカートを上に捲り上げている。

ただ、パンティとストッキングを履いているのでスグには挿入できない――。

「あつ……ちよつと待って」

典子は自分でストッキングとパンティを脱ぐことを躊躇していたようで、博之がそれをしてあげることにした。

「さつ、ちよつと屈んで」

博之は、尻の上のあたりを、ソロリと撫でるように触った。

「あんっ」

そこが性感帯だったのか、尻をねじるようにさらに突き出した。間髪入れず、

ビリリリリリリリリリリリ、ビリビリビリリリリリリリ。

初めはそう簡単には破けなかったが、両手で思いっきり引き裂くようにすると、あつという間にストッキングの原型は無くなった。

「うーん、なかなかいい塩梅だね」

さすがに大手都市銀行の制服で、破れたストッキングの残骸ともかなりマッチしている。おそらく行員が自宅の夜でも利用できるようなデザインになっているのだろう。

破れたストッキングの下から、純白のパンティが現れる。尻穴のうす暗く見える膨らみ



はアナルプラグで、おそらく黒色だ。ストッキングが無くなったせいか、パンティに付着している愛液臭がほのかに漂う。

「すう〜ん、はあ」

右手の平を、下からおマンコの膨らみに這わせた。湿っているはずの下側に膨らんだ丘に、指先をズリズリと擦りつける。肉ビラの感覚までは判らなかつたが、温かくなつた大陰唇の膨らみとそのちよつと湿つた感じが手のひらに伝わる。最後に指先を自分の鼻先にもって来て、

「すう〜」

典子に聞こえるように吸い込んだ。

「い……や」

「あーたまんねえ匂い」

別の手の興味は、すでに尻穴に入ってるアナルプラグにあつた。トントンと何か異物でもみるように。パンティの上から叩いた。

「あうっ」

一瞬、白パンティの尻がビクツと震えた。勤務時間もずっと装着していたプラグだ。頻繁に動かして腸液とかを馴染ませないと、乾燥して直腸にハマってしまったはずだ。そのことを知っていた博之は、パンティの上からアナルプラグを掴むと、

「おらあ、どしたの〜？」

わざとらしい言い方をしながら、アナルプラグをグリグリと掻き回した。

「ひいいい」

直腸に妙な痛みと快感そして排泄感が走ったのか、腰をガクガクと崩しながらも、その場に立ち続けている。